

震災あの日から未来へ

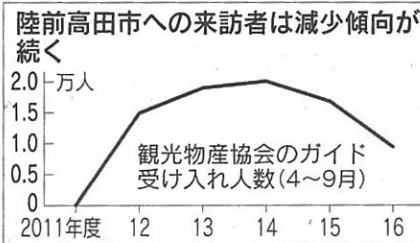
第4部 記憶をつなぐ④

東日本大震災から5年8カ月が過ぎた。時間の経過とともに震災への関心が薄れ、記憶が風化するのを避けられない。当時の記憶と教訓を未来に伝えていくことは今後さらに難しくなる。連載企画の第4部は被災地の「語り部」活動と企業の社内教育という2つの側面で、教訓と記憶をつなぐ努力の現場を追った。

薄れる痕跡 語り部苦心



語り部が案内する防災対策庁舎では14日に補修工事が始まった(宮城県南三陸町、写真上)。相馬市観光協会は地震の直後に避難する重要性を伝え続けている(福島県相馬市、同下)



伝える力・若手育成課題

南三陸ホテル観洋(宮城県南三陸町)の伊藤文夫渉外部長は14日午前8時50分、造成工事が続くホテル周辺を回る語り部バスのガイドを始めた。乗客が最も関心を寄せるのは震災遺構の象徴ともいえる防災対策庁舎。職員らが犠牲になった場所へ乗客は手を合わせた。

伊藤氏は「帰宅したら今日の経験を周囲に伝えてほしい」と呼びかけた。同日の午後1時、防災対策庁舎の周辺に数人の作業者が集まっていた。さび止めや強度向上などの補修工事が始まりだ。2017年2月上旬までは建設用シートに囲まれ、庁舎は見えなくなる。

神戸に学ぶ
「震災遺構が減るなかで教訓を伝え続けるには、語り部の能力向上が欠かせない」とバスを運ぶ相馬市観光協会阿部憲子氏は言う。神戸市や北海道の奥尻島などで過去の被災地を語り部が訪れ、教訓伝承の手法を学ぶ活動を始めている。津波で400人以上の犠牲を出した福島県相馬市は建物の撤去が速く、震災直後の風景がわかる場所ほとんどない。それでも相馬市観光協会は語り部活動を通じて「生かされた1時間」の反省を伝え続ける。

馬市を襲ったのは午後3時51分。地震発生から1時間5分後だった。観光協会の伊東博之事務局長は「市役所のテレビで仙台空港に押し寄せる津波を見ていた」。岩手や宮城の津波を生中継で見ながら、相馬にも来ると連想した人は少なかった。消防団が沿岸部の世帯に避難を呼びかけたが、反応は薄かった。「消防団の話聞き流し、すぐに逃げようと思った時に水が足元に来て、即座に体が持ち上げられた」。同協会の藤本篤史氏は津波にのまれて生還した人の証言を、こう語る。1時間を無駄にした教訓を忘れてはならない。岩手県の陸前高田市観光物産協会で語り部ガイドを務める美吉義正副会長には、観光客に必ず伝える言葉がある。「我々は何度も津波を経験してきたのに、記憶を風化させ、海岸部に向けて街を大きくしてしまった」。73歳の美吉副会長が幼いころ、街の中心部は高台にあった。人口が増えるにつれて「街が海岸に降りてきた」。沿岸部は商業地や工業地に用途を限って住宅は建てないなど、長期的な都市計画に教訓を生かさなければ、悲劇は今後も繰り返す。

氏は早期避難の重要性を痛感し、この5年で町内に多くの避難路や避難タワーを設けた。東北の教訓は四国まで伝わった。「津波の映像を見ても実感はできない。我々は太平洋戦争の映像を見て

同協会への来訪者は14年度をピークに減少傾向が続く。語り部は年配者が多く、後継者の確保も課題だ。「各地の語り部が連携し、若い世代を育てなければ」(美吉氏)。こんな危機感を持つ。語り部の大切さを知るのは東北だけではない。高知県黒潮町の大西勝也町長は震災直後に宮城県気仙沼市を訪れ、様子を尋ねた。同町は南海トラフ地震に伴い最大34級の津波が予想される。大西

いるが、戦争体験者に会わないと実感できないのと同じ(大西町長)。日本人が戦争の記憶を伝えてきたように津波の記憶をつなぐことが、東北の被災地の責務だ。

日本経済新聞
二〇一六年十一月十五日(火曜日)